

# 植民者二世と被植民者二世の

## ポストコロニアルの再会

——李恢成「証人のいない光景」を手がかりに

原 佑介

### 一 はじめに——植民地の「皇国少年」たちと戦後日本

植民地帝国日本の崩壊のあと、のちに「引揚げ」と一括して呼ばれることになる人びとの大移動が起こった。それは、日本人だけでも七百万人に迫る非常に大規模なものだったが、かれらとすれちがうかたちで、解放された被植民者たちもまた、長大な列をなしてそれぞれの故国に向かった。<sup>(1)</sup> 日本ではともすれば忘れられがちだが、そもそも「引揚げ」とは多民族大移動であった。

ところで、植民者にしろ被植民者にしろ、もといた場所に文字どおり引き揚げる大人たちと、その子どもたちとは、この大移動の意味合いが大きく異なっていた。親たちにとっての異郷で生まれ育った子どもたちからすれば、親たちの故郷への移

動である「引揚げ」は、帰国というより、むしろ国外追放に等しかった。このような二世たちの「引揚げ」にかんする注目すべき比較文学研究のなかで、平田由美はつぎのように述べる。

「あらゆる帝国は中心としての自己から区別される「他者」として被植民者を周辺化するが、支配と被支配の権力関係に置かれた二つの人種・民族は対抗しつつ相互に依存しており、日本人性と朝鮮人性がそうであるように、その両極では侵すことのできない先験的な「本質」が維持されている。「日本帝国臣民」という虚構のアイデンティティが消失したとき、帝国の中心に移動していた被植民者である朝鮮人と、周辺に移動していた日本人植民者が帰らなければならなかったのは、それぞれの存在に先立つ、この「本質」の場所であった。」<sup>(2)</sup>

戦後日本で書かれた旧植民者二世や旧被植民者二世の文学に

は、「引揚げ」るべく定められていたそれぞれの「先験的な」「本質」の場所」にたいする違和感や批判的思考の痕跡が無数に刻みこまれている。両者は、支配と被支配の対立的な関係を越えて、植民地支配の歴史のあとに書かれた文学だという意味で、いずれもポストコロニアル文学と呼ばれるにふさわしい性質を備えていた。

たとえば、満洲で幼少年期をすごした安部公房の「けものたちは故郷をめざす」（一九五七）や、清岡卓行の芥川賞受賞作「アカシヤの大連」（一九六九）といった植民地関連の文学作品はある種の「故郷喪失者」の文学として、戦後日本文学史において独特の位置を占めている。他方、このような植民者の文学と並走しながら花開いた在日朝鮮人文学は、解放後に「祖国」に「引揚げ」ることなく「在日」することについて語るものでもあった。これらはいずれも、「日本帝国臣民」という虚構のアイデンティティを批判することをつうじて、戦後／解放後に再編されたマジョリティとしての「国民」が拠つて立つ「日本人性」や「朝鮮人性」といった「侵すことのできない先験的な「本質」なるものに亀裂を入れる力を帯びていた。

こうしたポストコロニアル作家たちの活躍を踏まえ、渡邊一民はつぎのように指摘する。「一九七〇年前後は、日本で育ち日本の植民地政策ゆえに母語を奪われた在日朝鮮人作家の作品が一斉に開花したばかりか、敗戦で引揚げてきた植民地二世の作家がほとんど同時に作品を書きだした、近代日本の文学史上

画期的な意味をもつ時代であった。」本稿で着目する植民地樺太生まれの在日朝鮮人二世作家・李恢成（りかいせい／イフエンソン。一九三五・）は、この「画期」の中心に君臨した文学者の一人である。

一九七二年、李恢成は「砧をうつ女」（一九七二）で芥川賞を受賞し、日本国籍を保持していないはじめての芥川賞作家として文学史に名を刻んだ。同じ時期に、上述の清岡卓行のほか、三木卓、日野啓三といった旧植民者二世があいついで同賞を受賞している。一九六〇年代以降に本格的に台頭したこれらのポストコロニアル作家たちの多くは、一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけて出生した「皇国臣民」世代であった（植民地朝鮮で「皇国臣民ノ誓詞」の朗誦の強要がはじまったのは一九三七年のことである）。かれらは、総動員体制下の植民地帝国の各地で「皇民化教育」を受けたのち、一〇代ないし二〇代前半で敗戦／解放を迎えた。植民者と被植民者という対立的で非対称的な立場にありながら、異民族が教的マジョリティを占める土地——すなわち、帝国崩壊後に各「国民」の排他的領域として再編されていく「侵すことのできない先験的な」「本質」の場所」の外——で幼少年期をすごした共通の経験は、かれらの多くに朝鮮植民者二世だった五木寛之がいうところの「デラシネ（根なし草）意識を植えつけた。その意識の根底を成すのは、「外地」生まれの植民者二世として、あるいは「内地」生まれの被植民者二世として、いわば「異郷」と「故郷」のはざまで成長した

経験であった。

一九六九年に群像新人文文学賞を受賞した「またふたたびの道」によって登場するやいなや、李恢成は芥川賞受賞作「砧をうつ女」のほかにも重要な作品をたてつづけに発表した。そのひとつである「証人のいない光景」(一九七〇)は、戦争と植民地支配の歴史と決別したとされる「戦後日本」そのものが、かつて被植民者二世たちにも注入されていた「日本帝国臣民」という虚構のアイデンティティと同様にある種の虚構であるということを洞察した注目すべき作品である。

「証人のいない光景」は、雑誌『文学界』一九七〇年五月号に掲載され、単行本『われら青春の途上にて』(一九七〇)に収録されて以降、ほとんど忘れ去られていたが、近年、大型の文学コレクション『戦争と文学』(全二〇巻+別巻一、集英社、二〇一一・二〇一二)に収録された。当該巻(二〇巻、二〇一二)のタイトルは、「オキユパイドジャパン」である。こうしてこの小説は、占領期／戦後日本の歴史と帝国日本の植民地支配の歴史をつなげる作品として、あらたに現代的な意義を付与されてよみがえった。この点からも、同作は本誌の企画に合致するのではないかと思う(以下、本稿では同作からの引用を同巻からおこなう)。

さて、先にあげた論考のなかで、平田由美はつぎのようにも述べている。

「わたし」という主体は、「わたしではない他者」との多様な関係において作りあげられている。ところが、植民地主義の歴史は、主体でありうる他者との出会い損ないの歴史であり、植民者とはその出会いに失敗しつづける者の謂いである。植民地における日本人の隔離的集住<sup>11</sup>被植民者である住民との住み分けによる空間の分割や、支配言語と被支配言語という言語の分割と植民者のモノリンガルな言語状況は、他者との出会いを困難にするものであったし、皇民化政策は出会うべき他者そのものを抹殺しようとする企て以外のものではなかった。<sup>12</sup>

「主体でありうる他者との出会い損ないの歴史」の例として、植民地での物理的・言語的「住み分け」などがあげられているが、この歴史は、植民地帝国の消滅とともに過ぎ去ったわけではなかった。現代のいわゆる「ヘイトスピーチ」は、このことを如実に示す例であろう。「いい朝鮮人も悪い朝鮮人もいない。朝鮮人を皆殺しにしろ」などとジェノサイドを煽動することさえめずらしくない旧被植民者にたいする暴力は、まさに「植民地主義の歴史」のなかで形成・蓄積されたものであり、「出会うべき他者そのものを抹殺しようとする企て」以外のなものでもない<sup>13</sup>。このような現状を鑑みるに、植民者と被植民者の「出会い損ない」を乗り越えようとした「証人のいない光景」は、依然としてきわめてアクチュアルな問題をはらんでいる。

## 二 望郷の絆、植民地の亀裂

作品の分析に入るまえに、その背景について簡単に確認しておきたい。李恢成は、一九三五年に日本領樺太の真岡町（現ロシア領サハリンのホルムスク）で生まれた。朝鮮以外の植民地で生まれ育ったという出自は、日本生まれの一般的な在日朝鮮人二世たちと大きく異なる点であり、かれの文学に独特の風貌を帯びさせる要素になった。数え年で一一歳のときに樺太で日本の敗戦を迎え、四七年に家族でソ連領サハリンから決死の脱出を果たした（このとき、家族の一部が現地に取り残されたため、いわゆる「離散家族」になった）。

日本の敗戦時、樺太には四万三千人ほどの朝鮮人がいたとされるが、多くは米占領下の日本政府によって事実上の棄民にされ、重大な戦後問題として長く禍根を残すことになった。<sup>6)</sup> こうして、大勢の「在樺朝鮮人」が植民地体制の瓦解によって生じた複数の政治権力のはざまに閉じこめられ、置き去りにされるかたちになった一方、からくも脱出に成功した李恢成一家は、函館を経て長崎まで行き、「祖国」への「引揚げ」を目指した。ところが、ようやく解放された朝鮮半島は、南北分断を目前にひかえた大動乱期に突入しつつあった。そのため、結局一家は来た道を引き返すかっこうで北海道にもどり、「在日」するこ

とになった。

このような「未完の引揚げ」を経験した李恢成が、小説「人間の条件」で知られる満洲植民者二世の五味川純平との対談（二九七四）のなかで、興味深い発言をしている。李恢成は、みずからもまたある種の「引揚者」——ただし「まだ引き揚げ中」の——と規定したうえで、日本の引揚者たちにつきのような問いを投げかける。「中国から朝鮮を通ってくる、あるいは、コロ島を経て東シナ海に出て帰る、いろいろな方向から帰国する日本人引き揚げ者と、日本から朝鮮への引き揚げ者との体験には、どういう点が同じで、どこがちがうのか」、そして「植民地時代の朝鮮とか、かつての満洲などから引き揚げてきた日本人たちは、いったいどのように他民族を見ていたか、また現在どのように見ているか。激動の時代を生き抜いてきたこれら同世代の引き揚げ者たちが、当時何を見、いま何を考えているか」——こうした日本人引揚者たちへの問いは、戦後日本人そのもののへの問いとつながっている、と李恢成はみていた。<sup>7)</sup> 後述するように、これらの問いは、この対談に先んじて書かれた小説「証人のいない光景」が追究したテーマでもあった。

「引揚げ」をこのような広域的・複合的で多民族的な現象としてとらえる視角は、戦後日本ではほとんど成熟しなかったように思われる。引揚者自身をふくむ大多数の日本人にとって、引揚げとは、その前史としての植民史が捨象され、日本人たちの「労苦」だけが強調された、日本の領土と「国民」の内閉的

な収縮運動としてのあの「引揚げ」であった。しかし、前述のとおり、日本の収縮がもたらした「引揚げ」の当事者は、日本人だけではなかった。たとえば、米軍政庁の統計によれば、一九四五年一〇月から一二月のあいだに東アジア各地から南朝鮮に移動した朝鮮人だけをみても、日本から一一〇万人、北朝鮮から九〇万人（うち四割は避難民）、満洲から三〇万人、中国その他から一〇万人もの人びとが移動した。<sup>(8)</sup> 李恢成一家の移動が示すとおり、解放された被植民者たちの移動は、日本人の「引揚げ」よりもはるかに複雑であった。もちろんこれは朝鮮人に限ったことではない。たとえば、一九二四年に在日台湾人二世として神戸に生まれ、歴史小説家として活躍することになる陳舜臣は、解放後いったん台湾に移住するも、その後起こった「二・二八事件」をはじめとする政情不安のため、日本にもどって「在日」する道を選んだ。かれにとってどちらの航行が「引揚げ」だったのか、答えはかならずしも明快ではない。<sup>(9)</sup>

朝鮮の場合は、南北分断の破局が人びとのポストコロニアルの移動をいつそう複雑なものにした。解放後の在日朝鮮人文学史は、あの「引揚げ」ではない、あるいはそもそも「引揚げ」なのかどうかも定かではない移動の痕跡だらけだといっても過言ではない。一例をあげれば、作者の実体験と見聞をもとにして書かれた金石範の小説「乳房のない女」（一九八二）では、日本から済州島への「引揚げ」、南北分断の直前に島で横行した無差別虐殺（四・三事件）から逃れるための日本への「密航」、

さらには縁故のない朝鮮民主主義人民共和国への「帰国」など、日本人の一度きりの「引揚げ」とは比にならないほど複雑な旧被植民者のポストコロニアルの移動の諸相がなまなく描かれている。

さて、李恢成がはじめて「祖国」朝鮮の地を踏んだのは幼少期の一九四〇年のことで、このときは朝鮮南部にある母方の郷里を訪ねた。上述のとおり、解放後はサハリンを脱出して日本に定住するわけだが、朝鮮半島への再訪が実現したのは、じつにその三〇年後のことであった。小説家としてデビューしてまもない一九七〇年、韓国を訪ねた。すでに分断体制が固着化しており、朝鮮北部にある父方の郷里への道は固く閉ざされていた。つづけて七二年に再度訪韓し、白鉄、金承鉦ら著名な文学者と交流している。またこのとき、自身の小説の韓国語訳にたずさわっていた「失郷民」（「北」に故郷をもつ韓国人）作家李浩哲<sup>イホテヨル</sup>と会い、その案内で三八度線付近を訪ねるなどした。そして一九八一年、解放後はじめて出生地サハリンを訪問し、生き別れた祖母をはじめとする親戚と劇的な再会を果たす。

このサハリン訪問の際、李恢成は「同郷」の日本人墓参団と同じ船に乗った。船上でかれは、そこにいた旧「在樺日本人」たちと「ある種の親密な感情」を共有していると感じたという。だが一方でかれは、そこにはやはり大きな断絶がある、という不吉な感覚をいだいた。それは、たとえば「同郷」の日本人たちと会って真岡や樺太の思い出を語り合ったりするなかで、だ

れかがなにげなく「ロスケ」といった差別用語を口にする瞬間に李恢成のまえにあらわれた。「かつて「チョウセン」と差別されて辛い思いをしたことのある私としては、よしんば他民族に対するものであれ、日本人がこの種の言葉を平気でしゃべるのを聞くと、本能的に嫌悪を覚えた。<sup>10)</sup>自分たちを故郷から追放された「被害者」と位置づけたうえで「加害者」を「ロスケ」呼ばわりする人が、日本が植民地政策によって樺太に強制連行した朝鮮人のきびしい運命に関心を払わない」のはどうしたところか。樺太をなつかしむ日本人たちの回想記をいくら読んでも「全くといってよいほど朝鮮人の運命に触れていないのにはおどろしかなかった」——このような李恢成の批判は、旧「在樺日本人」のみならず、植民地支配の歴史にたいしてあまりにも無知・無関心な戦後日本社会全体を射程に入れたものだろう。<sup>11)</sup>

旧「在樺日本人」と共有するある種の「同郷意識」——それは「皇国少年」だったころの李恢成の主観では「同国意識」でもあった——と、日本人たちの「帝国意識」にたいする違和感の葛藤は、李恢成の植民地体験の意味づけを困難なものにした。また、どこに住もうが自分が朝鮮人であること自体には疑いの余地がなかった親たちとちがい、「本質」の場所<sup>12)</sup>の外で生まれ育ったかれは、自分は果たして本当に朝鮮人だといえるのか、もしそうでないとしたらいったい何者なのか、という根源的な問いをかかえこむことになった。加えてそこには、「日本帝国臣民」という虚構のアイデンティティ<sup>13)</sup>の呪縛をどう

やって解くか、という「皇民化」世代としての重いポストコロニアルの精神的課題があった。このようなテーマは、どっちつかずの宙ぶらりんな存在を象徴する「半チョップパリ」（李恢成一九七二）や「巴刹<sup>バツチユイ</sup>（蝙蝠）」（父親が朝鮮人・母親が日本人だった飯尾憲夫、一九八〇）といった表現で、小説のタイトルそのものに直接的に反映されるケースもあった。その意味で、同じ在日朝鮮人二世のなかでも、「皇民化」世代と、一九四〇年代以降に生まれた解放後世代のあいだには、一世と二世の差異とはまた別の大きな差異があるといえる。「証人のいない光景」は、そんな「皇民化」世代の在日朝鮮人二世が悩まされつづけたポストコロニアルの自己認識のあやふやさがたくみに表現された作品である。

### 三 「ファシスト少年」と「同化少年」の再会

小説「証人のいない光景」は、植民地樺太で生まれ育った朝鮮と日本の旧「皇国少年」が、戦後日本で数十年ぶりに再会する物語である。異民族同士でありながら同じ「皇国臣民」として教育されることによって精神の深部で分かちがたくからみ合ってしまった両者の戦後／解放後の出会いなおし——あるいは依然としてつづく「出会い損ない」——をテーマにした作品だといえよう。



この二人称小説の主人公は、樺太の「M国民学校」で親友の間柄だった在日朝鮮人二世の金文浩<sup>キムンホ</sup>と日本人の矢田修である。作者の分身である金文浩を中心にしつつも、両者の視点が交互に一人称小説的に語られる構造になっている。金文浩は、日本人級友たちが「ファシスト少年」だった一方、自分はその一員でありながら被植民者としてのねじれをかかえこんだ「同化少年」だった、と当時をふりかえる。二人は、日本の敗戦後の混乱で散り散りになり、戦後長らく音信不通の状態がつづいていたが、金文浩がたまたま書いた新聞投書を矢田が偶然みかけたことがきっかけになって手紙のやりとりをはじめようになり、二四年ぶりの再会を果たす。

ところで、このような物語の大筋は実体験が直接的な素材になっている、と作者の李恢成自身が種明かしをしている。本人の説明によれば、小説「証人のいない光景」を執筆するきっかけになったのは、一九六九年八月にかれが発表したあるエッセイだったという<sup>(1)</sup>。そのなかで李恢成は、樺太時代の日本人同級生たちと再会して、かれらが戦後民主主義をどのように受け止めて生きてきたのかを知りたい、と所感を述べたのだが、たまたまこの文章を読んで李恢成にコンタクトをとってきたのが、矢田修のモデルになるH・Yであった。こうして、樺太の二人の「皇国少年」は、植民地の消滅と「引揚げ」、そして戦後の四半世紀を経て、ふたたび相まみえることになる。李恢成は、このときH・Yが語ったある光景の記憶の話に触発され

て、「証人のいない光景」を書いたのであった。その光景とは、一九四五年九月、H・Yが、学校の裏山のカボチャ畑で李恢成と一緒に目撃したと主張する、無残にはらわたをさらけ出した兵士の腐乱死体のことであった。

矢田修は、金文浩に宛てた手紙のなかで、「大日本帝国の屍体」にほかならないあのおぞましい死体は、帝国軍人はけつしてぶざまな死に方をせず美しく散華するのだと信じこまされていた「ファシスト少年」に、「初めて自分を取り巻いていた世界からまやかしを感じ」させたあまりにも悲しいものだった、とふりかえる(六二頁)。矢田のトラウマ的な「戦後」は、絶対的な価値だとすりこまれていたものにはげしく「裏切られた実感」からはじまったのであった。

ところが不思議なことに、金文浩のほうは、どんなに思いかえてみても、本当に目撃したのなら相当衝撃的だったはずのその死体の記憶がない。そんなかれに向かつて矢田は、「あの頃、君もはげしい同化少年であった。それが今は朝鮮人となったのだから祝福したい」と、旧友の植民地帝国からの解放を寿いだうえて、「その幸福はあの神宮山での光景を忘れることによって得ることができたのか、またそれなら何故忘れることができたのか、そこを猛烈に知りたいし、できれば僕のためにあの光景を思い出してほしい気がするのです」と書き送る(六二三頁)。この問いかけに、金文浩は困惑する。仮に、金文浩も矢田と同じように実際にその死体を目撃し、そのうえで矢田とちがって

それを忘れることができたのだとしたら、それはなぜか。そもそも、「大日本帝国の屍体」の記憶を失うことは、金文浩にとって本当に「幸福」なことだといえるのか——こうして、同じ植民地の歴史を生きたはずの二人のあいだに、ポストコロニアルの「記憶の抗争的な関係」が不可解な争点として浮かび上がる。<sup>13)</sup>

李恢成は、「証人のいない光景」発表の二年後、『朝日新聞』に寄稿したエッセイのなかで、この小説の主題に言及している。かれは、「ここにはたんに一方の記憶ボケといつて見過ごせぬ象徴的な意味があるようであった」と、両者の記憶のずれになんらかの意味を読みとろうとしたという。「もしかすると、戦争体験のうけとめ方の違いが日本人のH・Yと朝鮮人の僕とのあいだに介在していたのではないのか。だとすれば、この件からどんな意味を抽出することがもとも公平で正当なことになるのか」——李恢成は、小説「証人のいない光景」をつうじて、植民地で成長した朝鮮人と日本人の「戦争体験のうけとめ方の違い」を、その記憶のずれからなんらかの「意味を抽出する」ことによって浮かび上がらせようとしたのであった。<sup>14)</sup>

では、作品のなかで、金文浩と矢田修の記憶のずれ、あるいは金文浩の記憶の欠落に、どのような意味が付与されたのだろうか。兵士の死体の光景は、それによってフアナティックな神国幻想を打ち碎かれた矢田修が戦後かえこむことになるトラウマ的な記憶になっていくわけだが、同じ光景をみたはずの金文浩がそれを憶えていないということは、かれには天皇制フア

シズムの後遺症がないということの意味するのだろうか。だが、「フアシスト少年」にさらにねじれが加えられた「同化少年」のほうに、なんの影響もなかったはずはない。だとすれば、その記憶がすつぽり欠落しているということ自体が、日本人少年のトラウマとは大きく異なる朝鮮人少年の深いトラウマの存在を示唆しているのではないか。

「大日本帝国の屍体」をみた、つまりある意味でその滅亡をしかと見届けた日本人級友とちがい、戦後日本で継続する植民地主義と闘わなければならない在日朝鮮人にとって、帝国はまだ死んでいない。そのことにたいする懸念とある種の恐怖心を、李恢成はつぎのような不気味な空想に仮託して吐露した。「あの山の中に横たわっていた兵士がある日むつくりと立上がり、ゲートルを巻直し、銃を拾って山から下りてくる。あちこちの山から、同じような兵士達が「経済大国」の日本の町々に向いはじめ、隊伍を組んで宮城へと行進していく」。<sup>15)</sup>

当時の金文浩は、周囲の人びとが鼻白むほど異様に熱心な「皇国少年」であった。李恢成自身にいわせれば、それは「強いられた境遇での奴隷の真面目さ」にほかならなかった。<sup>16)</sup>朝鮮人であること自体に後ろめたさやいまわしさを感じることを強いる天皇制フアシズムのもとでの「奴隷の真面目さ」を、植民地解放と「戦後民主主義」によって、金文浩は乗り越えたのか。<sup>17)</sup>しかし、念願の再会を果たし、深い対話の時間をもつことができたにもかかわらず、金文浩の記憶の奇妙な欠落は二人のあいだ



に放置されつづける。

金文浩が「大日本帝国の屍体」のことを忘れたのか。それとも、その光景はむしろ矢田の妄想の産物で、植民地に「大日本帝国の屍体」などそもそも存在しなかったのか。だとしたら、「大日本帝国」は戦後日本で今もまだ生きているということになるのか——こうして、不可解な謎を宙ぶらりにしたまま、不穏な後味の悪さを残して物語は幕を閉じるのであった。

#### 四 追いつめる「金の鶏」

「ファシスト少年」矢田修が帝国兵士の死体をみるることによって世界に対する深い不信感を植えつけられたのと同じころ、「同化少年」金文浩のほうも、たしかに大きな精神的混乱のなかに投げこまれていた。矢田の語る光景をなんとか思い出そうとあれこれ考える金文浩は、日本の敗戦直後の自身の精神状態のことを、そういうえば「あの頃はへんだった」と回想する。

何かにたえず凝視<sup>みつ</sup>められているようだったのだ。その何かはこれといった正体を見せぬが、ふとしたとき二宮尊徳像のように感じられたり御真影奉安殿のように見えたりする。「……」するとしだいに軀が石膏のようにかたくなり、言うことを聞かなくなっていく。すると耳許で大谷先

生の声がふくれてくるようなのだ。金山をみよ……金山をみよ……金山をみよ……金山をみよ……（ルビママ。六二六頁）

こうして「金山文浩」は、「聖戦に勝つためには日本人に劣らぬ努力をすべきだ」とみずから進んで朝鮮の民族性を捨て、日本人以上に模範的な「ファシスト少年」になろうと必死に努力した。その意味でかれは、天皇制ファシズムの狂熱を日本人級友たちよりもさらに深く精神に刻みこまれていたのであった。

このことにかんして李恢成は、一九七二年の訪韓の際におこなったソウル大学での招待講演のなかで、「皇民化教育」の過程で脳裏に焼きつけられた「帰化人」<sup>たじまもり</sup>田道間守のイメージについて語っている。「ところで教科書でこの人物がどのように取り上げられていたかという点、帰化した田道間守は日本国天皇のために忠誠のかぎりを尽したということにつきます。当時はいわゆる日韓併合の時代でしたから、この田道間守のような赤子になるようにとの教育をうけたわけです。『……』ぼくはこの田道間守のようなりっぱな人間になりたいと決心したものでした。日帝がわが国を植民地化し、アジアにたいする侵略戦争をおこしたあの時代の異常さを想像するならば、少年のぼくが田道間守を志願したからといって、たぶん諸君は非難はしないだろうと思います。ぼくにとつて皇国臣民になることは真理そのものであり、じつさい、その道を歩もうと一途に考えていたものでした。」<sup>(18)</sup>

ところで、「証人のいない光景」には出てこないものの、同時期の李恢成の小説で何度か言及される重要なエピソードがある。それは、日本の敗戦後の一時期、朝鮮人にもどる（なる）ことになった旧「同化少年」がくりかえし同じ悪夢にさいなまれるという話なのだが、李恢成自身がそれは実体験だと証言している。<sup>(19)</sup>

デビュー作「またふたたびの道」の主人公で作者の分身である——したがって「証人のいない光景」の金文浩の分身だともいえる——哲午<sup>チルオ</sup>は、敗色濃厚となった大戦末期、「神武天皇の弓の先に止り、長スネヒコらをこらしめた金の鵄が翔んできてかならず鬼畜米英をやつつけるのだ」という奇跡を熱烈に信じる「皇国少年」であった。真夏のある日、哲午はついに天空を舞う金色の鵄を目撃し、気が狂ったようにそのことを人びとにふれてまわる。しかし、少年の一徹な信仰もむなしく、結局なにも起こらず、その直後に帝国はあっけなく敗戦する。そのような霊的体験をしたあと、樺太を去るまでの一時期、哲午は悪夢をみて飛び起き、痙攣的に泣きわめいて家族を困惑させる、ということをくりかえすようになる。

なぜか金の鵄が翔んできて夢のなかに現われるのだ。もうその鳥はかつてのように燦然としていなかった。褐色につつまれ鋭い嘴と爪を立てていた。だが褐色の鵄は哲午の意識に爪を立て、いつまでも金の鵄であろうと嘴を構えて

くるように見える。

そんな夢はやがて消えたが、哲午はしばらくしてその金の鵄が自分の頭脳のなかに立ち戻ってくるのを感じるようになっていた。それは哲午が曲りなりに（朝鮮人）であろうと願うときに思い出される。いや、むしろ（朝鮮人）に劣等感を覚えるとき、その鳥はかつての金色の耀やきを増してくるように思われるのだった。

だが哲午は自分が半チヨツパリのまま、金の鵄に飼われるわけにはいかないと絶望的な反抗をしていた。どうしても誇らしい朝鮮人になりたいと思うのだった。<sup>(20)</sup>

とくに注目すべきなのは、「（朝鮮人）に劣等感を覚えるとき、その鳥はかつての金色の耀やきを増してくるように思われるのだった」という一文であろう。解放直後の朝鮮人少年にとりついて離れないおそろしい「褐色の鵄」——かつて想像のなかで燦然とかがやいていた「金の鵄」——とは、「証人のいない光景」の金文浩を凝視しつづけた「二宮尊徳像」や「御真影奉安殿」に類する象徴、すなわち、解放後も「同化少年」に迫いすがり、朝鮮人にもどる（なる）ことを妨げつづける天皇制ファシズムのイメージが凝縮したものであろう。

神話世界における神武天皇とその弓の先にとまった「金の鵄」は、日本人が超越的な権能によって邪悪な異民族を征伐するという自民族中心主義的な歴史イメージの核心的表象である。熱

狂的に推し進められる「皇民化教育」のなかで、日本人子弟はもちろんのこと、植民地の子どもたちの精神にも、天皇とその武力（「皇軍」）の至高性と無謬性が叩きこまれ、「金の鵄」のイメージは幼いかれらの脳裏に烙印のように焼きつけられた。たとえば、一九二二年に朝鮮に生まれて慶應義塾大学に学び、解放後は渡米して経済学者になった韓国人の崔基一<sup>チ・ギイル</sup>が、当時のことをつぎのように回顧している。「歴史教科書の最初の絵には、初代神武天皇が弓手として描写されていたのだが、かれの弓の先には金の鵄が彫刻されており、そこからまばゆい光が放たれ、敵軍はあわてて後退し、あたふたと逃げていた。九歳の少年にとって、その絵は興奮をそそり、想像力を刺激した」<sup>21</sup>かれは「金の鵄」が神武天皇の弓に彫刻されていたと記憶しているが、それはさておき、皮肉なことに、ここであるところの「敵軍」が現実の意味するものとは、ほかならぬ朝鮮人や中国人の抗日独立運動家たちのことなのであった。植民地の子どもたちは、支配者である「皇軍」と一体化させられることによって、そのような民族的な想像力を奪われ、倒錯的に自民族を憎悪・蔑視するようになってしまう。こうして、「証人のいない光景」の金文浩のような「同化少年」が、植民地帝国の全域で量産されていたのである。

## 五 おわりに——「遅れてきた青年」たちのポストコロニアル文学

「ファシスト少年」矢田修のなかで崇高な「英霊」が無残な死体へと変貌したのと同じように、「同化少年」金文浩のなかでも、雲間でまばゆくかがやく「金色の鵄」はグロテスクな「褐色の鵄」へと変貌し、植民地解放後もなおかれに追いすがる。在日朝鮮人がその民族性に劣等感やいまわしさをおぼえればおぼえるほど「かつての金色の耀やきを増してくる」「褐色の鵄」——「象徴天皇制」という無難な看板に模様替えして戦後も残存した天皇制ファシズム——は、戦後日本で継続する植民地主義的な状況のなかで、復活のときを待つて、かつての被植民者の精神に潜みつづけるのであった。

「いまは自分が朝鮮人としておのれを立証し得ると思っていても、果して同化少年の影はないかと言うとどうい断言できやしない」（六四〇頁）と不吉にも自覚する金文浩は、再会した矢田をまえにして、植民地で死んだはずのあの帝国軍人が戦後日本でまだ生きているような錯覚にとらわれる。「生きている兵士が矢田のまわりで息をこらして蹲っているような心配がした。なんとということだ。二人はおたがいを理解し、証人となることもできないのに過去の影の部分だけはひどく似ているのだ。」（六四七頁）天皇制ファシズムの影をいまだにひきずっているがゆえに、解放された朝鮮人である自分も戦後の日本人である相手も、たがいにたいしてあらたな時代——植民地支配の歴史をおわらせ、克服したはずの時代——のあらたな生の「証

人」になることができないでいる、と金文浩は感じるのであった。

自分が矢田の証人になり得ていないのもたしかだが、矢田もただだけ自分の生き方を理解しているだろうか。二人ともまだどこかで昔の影を曳いているのだった。矢田はファシスト少年の影を、自分は同化少年の影を。だから昔の幻影に氣を奪われてしまい、おたがいに現在を理解し合う余裕がないんじゃないのか。(六四二頁)

こうして、植民地帝国の消滅とともに死滅したはずの天皇制ファシズムの氣配におびえる旧「ファシスト少年」と旧「同化少年」の「出会い損ない」というかたちで、植民地主義の歴史が戦後日本にも持ち越されている、ということが暗示される。

矢田修は、日本の「戦後」を、「ファシズム」から「パシフィズム」へとさっさと宗旨替えしてしまった大人たちにトランプのババぬきで勝ち逃げをされたような時代だと感じていた。「大人達はカードの数字をたくみに合わせ、どんどんと持ちカードを減らしていく。次は君の番だ。さあどれでも、取り給え。引くとババが回ってき、そいつはべったりと手に貼りついて取れなくなってしまう。そのあいだに大人達は手を叩いて上つてしまい、ついに子供はババを手にしたまま最後まで取り残されてしまう。戦争から受けた傷がなぜかそんな光景となつてうつってくるのであった。」(六三五頁)

このようなぼつんと取り残された感じは、天皇制ファシズムの集团的狂気を幼い魂の全体で受け止めさせられたいわゆる「少国民世代」に、ある程度共通する心情だったといえるかもしれない。たとえば、大江健三郎はこの世代の戦後文学の旗手だが、奇しくも李恢成と同年の一九三五年生まれである。ちょうど金文浩と矢田修のように、大江は李恢成やH・Yの同級生だったわけである。そんなかれの「遅れてきた青年」(一九六二)は、まさに矢田のいうババぬきのような「戦争から受けた傷」をテーマにした長編小説である。日本の敗戦の直前、主人公の日本人少年のトラウマ的な精神的転回を準備したのは、兄世代の青年の宣告であつた——「村に來た予科練の青年がこういつたとき、すべてが始まったのだ、戦争は終るぞ、きみは幼すぎで、戦争にまにあわないよ、ぼうや！」<sup>(2)</sup>

李恢成は、結果的にどの世代よりも熱狂的な「ファシスト」になるほかなかつた帝国日本の「少国民世代」の一員であつた。かれは、そんな自分たちを置き去りにした「パシフィスト」たちの時代の欺瞞を、この世代の戦後文学においてもやはり看過されがちであつた植民地主義の問題を考えぬくことをつうじて暴こうとした。そしてそれは、李恢成のみならず、金鶴泳らほかの在日朝鮮人二世、安部公房ら日本人植民者二世など、「主体でありうる他者との出会い損ないの歴史」を克服するという課題を親世代から引き受けて背負うことになつたポストコロナアル作家たちに通底する問題意識であつた。

注

- (1) 石田淳『戦争と人口構造——高度経済成長の基盤としてのアジア・太平洋戦争』荻野昌弘編『戦後社会の変動と記憶』（新曜社、二〇一三年）三六―三七頁参照。
- (2) 平田由美『他者』の場所——「半チヨッパリ」という移動経験』伊豫谷登士翁ほか編『「帰郷」の物語／「移動」の語り』（平凡社、二〇一四年）三一頁
- (3) 渡邊一民「解説」梶山季之『族譜・李朝殘影』（岩波現代文庫、二〇〇七年）二二五頁
- (4) 平田由美、前掲、五二―五三頁
- (5) 加藤直樹『九月、東京の路上で』（ころから、二〇一四年）、一八二頁
- (6) 角田房子『悲しみの島サハリン』（新潮社、一九九四年）四九、六八頁参照。
- (7) 李恢成『参加する言葉』（講談社、一九七四年）一三四―一三五頁。初出は、『野性時代』一九七四年六月号。
- (8) ブルース・カミングス『朝鮮戦争の起源』一卷（明石書店、二〇一二年）八三頁参照。
- (9) 野嶋剛『タイワニーズ——故郷喪失者の物語』（小学館、二〇一八年）二五五―二五八頁参照。
- (10) 李恢成『サハリンへの旅』（講談社文芸文庫、一九八九年）六〇―六一頁
- (11) 李恢成、同書、六二頁
- (12) 李恢成『沈黙と海』（角川文庫、一九七八年）一二三―一二六頁参照。
- (13) 河合修「記憶／「私」／小説——李恢成を視座として」『日本文学誌要』七一号（法政大学国文学会、二〇〇五年）五五頁
- (14) 李恢成、前掲『沈黙と海』一三二頁。初出は、『朝日新聞』一九七二年八月一日夕刊。
- (15) 李恢成、同書、一三四頁
- (16) 李恢成、同書、一三二頁
- (17) 竹田青嗣『〈在日〉という根拠』（ちくま学芸文庫、一九九五年）一一―三九頁参照。
- (18) 李恢成『可能性としての「在日」』（講談社文芸文庫、二〇〇二年）二四六―二四七頁
- (19) 李恢成、前掲『沈黙と海』、一二七頁参照。
- (20) 李恢成『またふたたびの道』『〈在日〉文学全集』四卷（勉誠出版、二〇〇六年）六四頁
- (21) 한수영『전후문화를 다시 읽는다』（소명출판、二〇一五年）一七七쪽 참조.
- (22) 大江健三郎『遅れてきた青年』（新潮文庫、一九七〇年）九、一〇頁